

## 和歌から説話を見る

唱導史の観点を中心にして

ON THE FUNCTION OF POETRY IN MEDIEVAL BUDDHIST LITERATURE

An aspect of the history of Buddhist preaching

Hartmut O. ROTERMUND\*

This paper tries to elucidate the function of poems in the Buddhist didactic literature (*setsuwa*).

It first gives an overall view of the place and function of poems in Muju's major work, the *Shasekishû*, before taking up an analysis of a kind of *i-hon* ("different version") of the *Shasekishû*, the 1961 discovered *Konsenshû*. One particularity of this text is the fact that the quasi-totality of its *setsuwa* stories is ending in one or two poems. An analysis of those "final poems" shows easily that in many cases the content of the story is exactly identical to the message of the poems. In other cases however it becomes obvious that these "conclusion-poems" introduce, if not a radical new interpretation, so at least a somewhat new aspect in the comprehension or the finality of those stories.

---

\*ハルトムート・オ・ロータモンド フランス国立高等研究院教授。平成9年度国文学研究資料館客員教授。専攻は仏教文学、日本宗教史。著書に、*Pelerinage aux neuf sommets -carnet de route d'un religieux itinerant au Japon du 19e siecle.* (CNRS 1983)、*Collection de sable et de pierres-Shasekishû* (Gallimard, Paris 1979)、『江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』岩波書店、1995年、*"La sieste sous l'aile du cormoran" et autres poèmes magiques. Prolégomènes à l'étude des concepts religieux du Japon* (L'Harmattan Paris 1998) など。

One of the findings is that many *Konsenshû* - poems are the expression of a Zen-orientated message which suggests a sort of interiorisation of the otherwise plain message of the story, or are stressing the right understanding and the immediate applications of the *setsuwa*-finality.

Compared with the *Shasekishû* this peculiarity of the *Konsenshû* - quite unique in *setsuwa* literature - reveals, more than did the *Shasekishû* - the characteristics of a clearly preaching orientated didactical narrative literature.

## 1

無住一円の『沙石集』は、説話集として見ても、説教本として見ても、中世文学史上、いや日本中世文化史上見逃せない作品でしょう。弘安2年～弘安6年(1279～1283)の間に書かれている事は序や文末の識語によって明らかにされています。無住は、一応1283年(弘安6年)に筆を置いたにもかかわらず、その後も何回となく手を入れ、書き直しをし、書き加えもした事が、『聖財集』や『雑談集』、又多数の『沙石集』の諸本が裏付けています。かなりの数の異本が、すでに無住の生存中に流布されていたようです。

『沙石集』の話をあえて分類すると——登場人物による分類はとりあえず別として——大ざっぱに④笑話、⑤靈験話、⑥教訓的な話、⑦教義中心の話、と考えられます。只し、多くの場合この分類は不適切であって、一つの話の中に色々な要素が交錯しているものが実に沢山あります。

それぞれの説話集にみる話のファンクションはあまりにもまちまちであるだけに『沙石集』においても各々の話を分類するのは難しく、又『沙石集』が説話文学のどのグループに属するのかを考える事はさらに困難です。それについては説話の究極性が問われなければならないでしょう。説話の究極性とは教訓的なものでしょうか？ それならば必ずしもある時代の宗教事情を真実には伝ええないという事も有り得ます。あるいは経験、目撃、見聞した事を筆者の考え

と共に伝えるという事になります。

慶長10年の刊本の識語によって『沙石集』には広本と略本の存在がある事が分ります。その事は比較研究者の興味を唆るだけではなく、『沙石集』全体の解釈にかかわってきます。どちらのテキストを基にして解釈したらよいでしょうか？ 最も古いと考えられる広本系のテキストか？ あるいは無住が何度となく手を入れているところから、その思想的展開がみえる略本系のテキストか？

大ざっぱに見ると広本は話し言葉、当時の新語が多いようで、略本は書き言葉、古語が中心です。ですから、略本は広本の単なる書き抜きではありません。無住の草稿——現存していない——にあった説話は恐らく説教に使われていたのですが、一方では読み物にもなっていたはずで、言葉の変化、脱落、追加等は、そこから理解出来ます。時代と共に、話し言葉の色合は薄くなり、テキストは説教に応用されつつ、書き直されたり、再構成されたりして、流布されてきたでしょう。このような経過で広本の上に成立した略本はいっそう説教としての究極性がみえてきます。

『沙石集』は江戸時代迄広く読まれていて、ことに説話集というよりは、法語、仏書とみられたようです。無住の著書中、『沙石集』のみが注目を浴びたようで、『続沙石集』『新撰沙石集』等が近世に入ってから続いて出版されました。又、当時の諸文芸分野にも影響を与えた事は、よく指摘されています。中世に於いて、『沙石集』を直接後継した作品としては『金撰集』が注目されます。

## 2

1961年、神宮文庫で発見された『金撰集』は『沙石集』の書き直しの一種と見られますが、只その書き直されたテキストを細く分析しますと、案外に複合的なのです。ある部分は広本『沙石集』に近く、全体は略本に随っています<sup>①</sup>。『金撰集』の説話146の内139話は『沙石集』との一致をみます。『金撰集』の現

本は一、二、四巻から成り、第三巻は欠巻となっていますが、恐らくそれは『沙石集』第四巻末と第五巻本に相応します。

それでは、『金撰集』が編著されたのはいつであるかを問えば、曾我兄弟の名が出てくるので、その典拠が曾我物語である所から、それは14世紀の後半である事を示唆しています。又一方『新千載和歌集』や、『風雅和歌集』から選り取られた和歌があるところから、前述の仮定が裏付けされます。いくつかの説話の末に付記されている文からは、編著者は無住と同じ臨濟僧であった可能性が有ります<sup>②</sup>。

さて、『金撰集』が『沙石集』と大きな違いを見せるのは、殆んどの説話の末に書き加えられた和歌にあります。これらの和歌の機能的分析を試みる前に、『沙石集』を通して和歌と仏教との関係に少しだけ触れる事にします。

### 3

日本文学の中で極めて重要な位置を占めている和歌は、あらゆる分野の研究——宗教史や思想史——にとって貴重な材料となります。和歌の徳について、『古今集』序をはじめ、中世の歌論に詳しく述べられています。本地垂迹の神仏習合思想が絶頂となった中世では、和歌即陀羅尼説が提唱されたわけですが、仏教側に於いては、根本的には文学一般と同様に和歌は狂言綺語として否定されました。只、仏道に入る方便として、又は縁として評価を得た和歌の狂言綺語観は、説話や歌論の中にしばしば引用されています。『沙石集』の次のような記事はよく知られています<sup>③</sup>。

〔1〕凡<sup>およそ</sup> 狂言綺語ニ、和歌ヲ入ル、事ハ、<sup>ぜんか</sup> 染歌ト云テ、<sup>いひ</sup> 愛情ニヒカレテ、ヨシナキ色<sup>いろ</sup>ニソミ、<sup>くう</sup> 空ノ詞ノカザル故也。<sup>ナリ</sup> 聖教ノ理ヲモノベ、<sup>しやうげう</sup> 無常ノ心ヲモ連テ、<sup>つらね</sup> 世縁俗念ヲウスクシ、<sup>な</sup> 名利情執ヲモワスレ、<sup>ふゆ</sup> 風葉ヲミテ、<sup>うへ</sup> 世上ノアダナル事ヲシリ、<sup>しんちゆう</sup> 雪月ヲ詠ジテ、<sup>いさぎよき</sup> 心中ノ潔理ヲモサトラバ、<sup>いる</sup> 佛道ニ入<sup>なかだ</sup> 媒子、<sup>な</sup> 法門ヲサトルタヨリナルベシ。

和歌ヲ綺語ト云ヘル事ハ、ヨシナキ色フシニヨセテ、ムナシキヲ思ツヅケ、或ハ染汗ノ心ニヨリテ、思ワヌ事ヲ思ツヅケ、或ハ染汗ノ心ニヨリテ、思ワヌ事ヲモ云ヘルハ、實ニトガタルベシ。離別哀傷ノ思切ナルニツキテ、心ノ中ノ思ヲ、アリノマ、ニ云ノベテ、萬縁ヲワスレテ、此事ニ心スミ、思シヅカナレバ、道ニ入ル方便ナルベシ。

和歌ノ一道ヲ思トク〔二〕、散亂鹿動ノ心ヲヤメ、寂然靜閑ナル徳アリ。又言ス〔ク〕ナクシテ、心ヲフクメリ。惣持ノ義アルベシ。惣持ト云ハ、即陀羅尼ナリ。

和歌＝陀羅尼＝仏道に入る方便との和歌観は、中世説話や数多くの説教本にも表われています。

続いて、『沙石集』の中にある和歌の位置とファンクションを検討してみます。説話の筋立てに一致し、その話の成り行きの一部である和歌を①のグループとします<sup>④</sup>。これは、場合によっては、教訓的ニュアンスを含んでいます。②のグループは、「和歌徳説話」の歌、「心ある」と評価される歌、それと神明の「感じて人ヲ助給へる」歌<sup>⑤</sup>。この②のグループに近いのが和歌即陀羅尼の歌で、それは③のグループとします<sup>⑥</sup>。④は下手な歌、あるいは、下手ではないが、誤った解釈によって誤解されている歌<sup>⑦</sup>。⑤は説教の出発点である所の教訓性が強い歌<sup>⑧</sup>。⑥のグループは道歌という様ではないにしても、教訓資料に等しく、説教注釈文の末に置かれている歌とします<sup>⑨</sup>。

恐らく此等の分類はもっと精密にすべき事ではありますが、一見して分るように『沙石集』の場合は文末にある和歌が極めて少ないのです。文末に和歌を置いて一つの説話の全容を総括するような組立ては『金撰集』における特徴であり、この事は、説話文学全体をみても未曾有の現象です。『金撰集』の和歌の出典についてはある程度迄は明らかにされていますが<sup>⑩</sup>、不明な場合もかなり

多いのです。

それでは以下、『金撰集』にある和歌を説話と対照させながら、話の解釈上の観点から検討してみます。

〔2〕此ニ大願カヲ発ス人アリ。一切無縁ノ死タランヲ取捨ナント願アリ。去ル程ニ伊勢ニ参詣仕ル路ニテ死人在リ。是ヲ何ニセント思フ。シカレトモ伊勢詣ノ事ニテ候間、所全ナシト思テ去リ行ケハ、俄ニ足シイタクシテスコシモフマレス。返レハ吉シ。去ル程ニ是ヲ取捨テ、伊勢参詣仕レハ、躰テ足<sup>アシ</sup>モ直リ、伊勢ニ詣ケル。此近キ事也。

朝日影待ツ程モ無キ浮世ニモ情ケモ色モ深草ノ露<sup>ツカ</sup>

慈悲モ欠ケ情ケモ知ラヌ不当ナル人ノ心ハ犬トコソ見レ

西明寺殿<sup>①</sup>

この話は『沙石集』にはありません。しかし吉野に参拝する常観坊の話の中では、やはり道中死人に出会い、似かよった展開をみせています。<sup>②</sup> 結末は吉野の神の示現をこうむった常観坊が、忌む事よりも慈悲の貴さを悟ります。勿論、ここで吉野参詣と伊勢参りとは、根本的な性質が違っていることも、考慮に入れなければいけないでしょう。

『金撰集』では、死人に出会うという単純な背景でこのテーマを取り上げるが、『沙石集』では、死人のそばにはとむらいも出来ない幼い子供達があります。足が動かなくなる事で、神の介入が示される点は共通しています。『金撰集』では穢れを恐れ、無縁仏のとむらいをしなかった為、伊勢の神によって歩く事が出来なくなります。『沙石集』では、とむらいをするが、それによって我身がケガレたと思い、参詣をあきらめた時、吉野の神によって歩けなくなります。『金撰集』では神の示現（＝歩けない事）により、あるべき慈悲の心が行動を起こさせますが、『沙石集』の方では、先ず慈悲の心がとむらうという自然な行動で示されています。『金撰集』に於いては慈悲という言葉すら出て来ませ

んが、説話の後には2首の歌が記されています。(引用文〔2〕参照)。説話中にはない慈悲の観念は、この歌によって後に付け加えられていると考えて良いでしょう。

それにしても「情」と「色」の解釈は実に難しいものです。情け—慈悲、色—欲情と解釈するならば、この双方は同時に存在し得るのでしょうか。「色」と「情」で「色情」と解釈しても良いのでしょうか？ それならば、この世は執着が多いが、草の露ほどに無常でもあるという事でしょうか。とするとこの歌は人の行為より、世の中の真実を表現している様に思われます。

2番目の歌は、明らかに慈悲の心を強調するもので、説話中の人物への批判以上の強烈な表現がされています。初めの一首は人の世のはかなさが、次の一首は人として欠く事が出来ないはずの慈悲の心が、この説話からの教訓的メッセージとして響いてきます。

〔3〕尾張国熱田ノ神宮（「宮」カ）ノ語りシハ、性蓮房ト云上人、母ノ骨ヲ持テ高野ヘ参リケル次テニ、社頭ニ宿セントス。人皆知テ宿借者ナカリケレハ、大宮ノ南ノ門ノ脇ニ参籠シタリケル夜ル、大宮司ノ夢ニ、大明神ノ御使トテ、神官一人来テ、「今夜大事ノ客人ヲ得タリ。能々モテナセト仰ニテ候」ト云フト見テ、夢メ醒メヌ。使者ヲ社壇ヘ詣セテ、通夜シケル人ヤ有ルト尋ルニ、此性蓮房ノ外カ〔ノ〕人ナシ。使者帰テ此由申〔ス〕。「去テハ」トテ、此僧ヲ請ス。「母ノ骨ヲ持候ヘハ、エ参ラシ」ト申ケルヲ、「大明神ノ御下ニテハ、万事神慮ヲ仰キ奉ル事ニテ侍ニ、今夜カヽル示現ヲ蒙ヌル上ハ、私ニ忌マイラスルニ不及」トテ、請シテサマヘ持テ成シ、馬・鞍・用途ナント沙汰シテ、高野ヘ送ケル。無下ニ近キ事ナム。

サレハ春日御託宣ニ引ク、

主ハヨモ住ムトハ不知シヅノメノ戴ク水ニ宿ル月影<sup>イタ</sup><sup>⑬</sup>

この歌は明らかに浄、不浄の問題を取り上げ、外形より心が大事であると意

味づけています。歌にある戒めは、説話に登場する全ての人物に適応されます。先ず、宿を貸そうとしなかった人々の行為は不当で、外見の内側にある心を見ないばかりでなく慈悲の気持も持ちあわせていません。大宮司は、性蓮房の不浄の内側にある「浄」の心を知りません。示現がなければ、慈悲の気持も持たなかったかも知れません。しかし大宮司は、性蓮房のいる事を全く知らなかったかも知れないとの事を考慮に入れて情状酌量の余地があります。性蓮房は、中世の神々が本地垂迹に基いて根本的に仏であり、外面的事情より心を大事とする事を忘れ、伝統的な忌の考えを先行させました。

こうしますと、和歌は説話の筋よりも重要なニュアンス (nuance) を提供して来ます。目に映る物より、目に見えない心を見る事が大切であるというニュアンスは、説話の筋と矛盾しないが、むしろ和歌の方が明確に示しています。『沙石集』ではどちらかと言えば神明の慈悲を強調し、『金撰集』は付記されている歌によって、むしろ人間はどうあるべきかを強調します。

〔4〕又、去ヌル承久ノ乱ノ時、当国ノ住人恐ヲナシテ社頭ニ集リ、ツイ垣ノ内ニ世間ノ資財ヲ雑具マテ用意シテ、所モナク群リ居タル中ニ、或ハ親ニラクレタルモ有リ、或ハ産屋<sup>〔サンヤ〕</sup>ナル者モ有リ。神官共制シカネテ、大明神ヲ恐レマイラセテ<sup>⑭</sup>\*、御託宣ヲ仰クヘシトテ、御神楽<sup>ミカクラ</sup>ヲマイラセ、諸人同心ニ折請シケルニ、一ノ禰宜ニ託シテ、「我レ天ヨリ此国ヘ下タル事ハ万人ヲハク<sup>コク</sup>、ミ助<sup>ツク</sup>ン為也。折ニコソヨレ、忌ムマシキヲ」ト仰ラレケレハ、諸人一同ニ声ヲ上<sup>アゲ</sup>テ随喜渴仰ノ涙ヲ流シケリ。其ノ時ノ人、今ニ有テ語り侍ル。

去レハ神明ノ御心ハ何レモカハラヌニコソ。只、心清クハ身モ穢ガレシ。

遁ル身ニ物<sup>〔スコシ〕</sup>ノ少<sup>〔モ〕</sup>モチタキハ飢タル人ト修行者ノ為メ

西 チハヤフル神ニ礼拝スル時ハ本地垂迹是レ新タナリ<sup>⑭</sup>

ここで「折ニコソヨレ」は重要で、伝統的な禁忌観念は完全には否定されな



いが、状況事情によっては緩和されるという事です。前述の説話同様に、大切なのは心であると結ばれています。「去レハ神明ノ御心ハ何レモカハラヌニコソ。只、心清クハ身モ穢ガレシ」。

『金撰集』に付記される2首の歌の第一首に「遁ル身」とあるのは恐らく遁世者を意味し、これは新しい人物のカテゴリーを紹介してくれます。説話の中には、神主と庶民だけですが、ここで神社内に世間の資財を持ち込むという状況と歌にある「遁ル身」とは何らかの結びつきがあるでしょう。そこでふた通りの解釈が可能です。一つはこの歌では逆例を示し、説話中の人々と「遁ル身」を対照させ、物欲に対する心のあり方を解いています。二つは、多くの資財を持ちたい人と、少しの物だけが必要であるとする人とは、自ら行く道が反対であって在家と出家の対置でしょうか。それならば僧侶の貪欲さへの非難でもあるでしょう。いずれにせよ、この和歌は説話のレジユメというよりは、僧侶への教訓である様です。この2つの解釈に共通する所は、慈悲の徳を強調している点です。

さて『金撰集』は、この承久の乱の話の後には、前述の三つの説話に貫通しているところの死、ケガレ、忌、慈悲のテーマを取り上げて、『沙石集』のそれとはやや異った文を記します。

〔5〕日吉大明神モ、死人ヲ愍ミテ持ち捨テタル修行者ノ参リケルヲ、神人制シテ追イ出シケルヲ、御託宣有テ、哀ミテ召シ寄テ、宮人ヲ大ニ御誠アリケルト申伝ヘケリ。

西明寺、

世ノ中ノハカナキ物ヲ見聞ニモ猶ヲ進生死也ケリ<sup>⑮</sup>

私の解釈が間違っていなければ、ここにも神官への批判が見られると思います。ある意味では神道への批判でしょうか。前述の三つの説話と同様で、いつも神主が行動を起すには、神明の介入が必要です。

引用文〔5〕にある和歌ですが、問題なのは「進」という言葉で、その主語は何でしょうか。根本的には、それ程の意味もない人間世界であっても、なおかつ続いて行くと解くのか、あるいは、続いて忌みを守る神主と解くのでしょうか？ いずれにしても、この歌は前にある説話と同じ意味を表現しています。

これ迄見て来た和歌は〔2、3、4、5参照〕、神明の本質と本意を軸にしていた説話とは多少違っていて——あるいはその説話の究極性を広めていて——人を軸として、人間としての正しい見解を呼び出しながら、形より心〔本意〕が大切であるとの重要な点を強調しています。それは、『金撰集』の基礎に横たわる禪の精神の表われでもあるのでしょうか？

次の和歌二首は〔6、7〕、浄土教を基にして読まなければなりません。

〔6〕信濃国ニ或ル僧千部ノ経読タル持経者有ケリ。或ル念仏者、勸テ念仏門ニ入レテ、「法花<sup>ム者</sup>経読物ハ、必ス地獄ニ入也。浅猿キ罪障也。難行ノ者<sup>ヒト</sup>トテ拙事ソ」ト云ケルヲ信シテ、「サラハ一向ニ念仏ヲ申サテ、年来経読ム事ノ口惜サヨ」トノミ起居ニ云程ニ、口ノイトマナク心ノヒマナシ。カヽル邪見ノ因縁ニヤ、悪病付、物狂、「経読シ。クヤシ〜」トノミ口スサミテ、ハテハ、我カ舌モ唇モ皆ナ食ヒ切テ、血ミトロニ成テ狂死ニシニケリ。サテ勸メタル僧ノ云、「此ノ人ハ法花経読タル罪障、其ノ酬イ舌唇食切テ死ニヌ。サレトモ決定往生ハシツラン」ト云ケル。

念々<sup>ナリ</sup>仏心。心即是仏。除<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>。更無<sup>ニ</sup>別<sup>ノ</sup>仏。欲<sup>ハ</sup>求<sup>メン</sup>成<sup>ヲ</sup>仏。莫<sup>レ</sup>染<sup>ルコト</sup>一物。心性雖<sup>トモ</sup>空。貪<sup>トモ</sup>嗔<sup>ナリト</sup>体<sup>ノ</sup>実。入<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>門。端座<sup>ニ</sup>成<sup>シテ</sup>仏。到<sup>ス</sup>彼岸<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>。得<sup>ハシ</sup>波羅密<sup>ヲ</sup>。

南無阿弥ト唱ル音ハ他ニアラス仏ト音ト差別無ケレハ<sup>⑩</sup>

この和歌は、話の筋立てに直接つながっていないで、ある意味で浄土教の釈明の様にみえます。只し無住は、持経者が従来の読経の行を捨て、念仏門に入

るこの行為を「邪見」として非難しているのですが、無住のこの見解を評価するには、この歌自体はそれ程役に立ちません。それには本文末と和歌の間に置かれている「偈」の内容が参考になります。

歌の分析の方をもう少し続ける為に次の話をみてみましょう。

〔7〕 去ル弘長年中ニ都ニ、念仏門流布シテ悪人ノ往生スヘキ由ヲ云立テ、戒ヲモ持、経ヲモヨム人ハ、往生スマシキ様ヲ曼荼羅ニ図シテ、尊ケナル僧ノ経読テ居タルニハ光明指サスシテ、殺生スル者ニ接取ノ光明指シタル様ヲカキテ、世間ニモテアソ翫ヒケル比、南都ヨリ公家ヘ奏状ヲ奉ル事有リケリ。其状中ニ云、「彼地獄絵ト云ル者、悪ヲ造シ事ヲ悔、此曼荼羅拜スル者ハ、善ヲ修セシ事ヲ悲ムトカケリ。四句ヲ以テ物ヲ批判スル時ニ、善人ノ悪性モ有リ。上ヘハ善人ニ似テ、名利ノ心モ有、実ナキモアリ。悪人ノ宿善有テ、上ハ悪人ニ似テ、底ニ善心モ有リ、道念モ有ランハ、カヽル事ニテ侍ヘキヲ、愚癡ノ道俗ハ、偏執我慢ノ心ヲ以、持戒修善ノ人ヲハ、「悪人也、難行也、往生スマシキ者ノ」トテ謗リ軽シメ、造悪不善ノ者ヲハ、「善人也、接取ノ光明ニ照サルヘシ、往生決定」ト打チカタムル邪見、大キナル過ナルヘシ。聖教ヲモ学シ智者ニモ近付タルハ、人ノ中ニハ希レ也<sup>⑰</sup>。辺地在俗ノ中ニカヽル風情ノマヽニ聞エ侍リ<sup>⑱</sup>。

サレハ智者ニ親近シ聖教ヲ知識シテ、邪見稠林ニ入ヘカラス。是ノ故、心地観経ニハ、「菩提ノ妙果ヲハ成シ難キニ非ス。真ノ善知識ニ値ヒ難シ」ト説キ給ヘリ。出世ノ明師シハアツ不レ逢、枉テ大乘ノ良薬ヲ服セシト云ヘリ。<sup>(ママ)</sup>

南無ハ吾レ阿弥陀ハ仏去ハコソ唱ル音ハ悟リ也ケリ<sup>⑲</sup>。

引用文〔6〕の話では、読経と念仏との入れ替えをあやまちと指摘している様ですが、歌はいわば浄土〔真〕宗が唱える教義の有効性を確定しています。「邪見」とする所は、念仏以外の行を「雑行」とそしる浄土真宗、又説話中にある念仏門に入信した人物の読経行を悔い改め捨てるとの行為にあるでしょう。

邪見の因縁や、都での念仏流布、特に地獄絵を通しての熱心な勧誘、悪人正機の誤釈等は、浄土真宗の一種の排他主義、偏見であって、無住の非難はそれらに向けられているでしょう。

ところで〔6〕〔7〕に付記されている二首の歌は、念仏の価値を強調しています。無住にしても、決して念仏そのものを拒絶しているのではなく、せいぜい真宗の極端な行為を責めています。視野を広げて無住は、「念仏のみならず、天台、真言、禪門などにも辺国の末流には多く邪見の義門待るにや」と記して畢竟、正法を枉<sup>ま</sup>げて邪相する事を嘆いています。

『金撰集』のこの二首の和歌は、説話をより精密に解説する手段であると言える様で、要点は長い注釈〔7〕以上にさらに浮き彫りにされています。

次の例文は、沙石集の本文に比べ、『金撰集』が見せる表現の簡潔さを示してくれそうです。

〔8〕 叡山東塔ノ北谷楞嚴院ニ余リニ貧ナル僧ノ、山王ニ福ヲ祈リ、ソノ先生  
ノ事ヲキテ、其後ハ不<sup>〔スト云〕</sup>祈、物語リ有ル也。  
貧<sup>マス</sup>シキニ付テモイト、思ヒ知レ慳貪ナリシ酬イナラズヤ<sup>㊟</sup>

この歌では、現世での貧しさは、過去で慳貪であった因縁によるとして、僧侶を批判するこの説話全体のメッセージを取り上げ、貧困の原因を明示しながら、さらによく理解し、納得出来る様になっています。

〔9〕 昔、三井寺ノ山門ノ為メニ焼<sup>（ママ）</sup>払シテ、堂塔・僧坊・仏像・経巻残ル所ナシ。寺僧モ山野ニ交<sup>マジ</sup>ハリ、人モナキ寺ニ成ニケリ。寺僧ノ中ニ一人、新羅明神へ参テ通夜シタリケル夢ニ、明神御戸ヲ排ヒテ、世ニ御心地ヨケニテ見ヘサセ給ケレハ、夢ノ中ニ思ハスニ覺テ、「我寺ノ仏法守ラント御誓ヒ有ルニ、カク失セハテヌル事ヲ、何計、御歎キ深く思食スラント思フ所ニ、其ノ気色無キ事何<sup>イカ</sup>ニ」ト申ケレハ、「実ニ争デカ歎キ思ハザラン。去レト

モ此事ニ依テ、眞実ノ菩提心ヲ発セル寺僧一人有ル事ノ悦ハシキ也。堂塔・仏經ハ則チ宝ヲ有ラハ造ルヘシ。菩提心ヲ起セル人ハ千万人ノ中ニモ難シ有<sup>シト</sup>〔虫損〕ト仰ラレケルト見テ、彼ノ僧モ発心シテ侍ケルトコソ申伝タレ。

明神ノ御心、菩提心ヲ発、実トノ道ニ入ヲ悦ヒ給事、何ノ神モカハリ給ハシ。今生ノ事ヲ祈申サンハ神慮ニハ叶<sup>(ママ)</sup>ハレカシ。先世ノ果報コソ貧福定リ有リ。強テ現世ノ事ヲ神明・仏陀ニ申サンハ、且ハ愧シカルヘシ。実ニ愚ニコソ覚ユレ。同行業ヲ以テ菩提ニ向テ廻向シ、叶ハサランマテモ道心ヲ祈申ヘキ也。

大水ノ前キニ流ル、トチカラモ身ヲ捨テ、コソ浮フトハ見レ<sup>②</sup>

歌は説話とその軌道を一にして、流転輪廻から浮ぶには、資財などいっさいの放棄が必要であると奨励しています。只し、話と歌とには、少しの違いが見られます。話の方は、衆生が道心、菩提心を発する事を本意とする仏教的な神明を中心にしていますが、和歌の方は、人間がそこに到着するに必要な努力を強調しています。その為に火事によって富を失くし、解放された寺僧と「身を捨ててこそ浮ぶ」トチカラとを平行線に置いています。

こんな風は無住が道心の重要さを激賞している事は明らかであり、和歌の方は一種の貧困へのいざないと同時に僧侶とその貪欲への批判でもある様に思われます。「トチカラ」のイメージを出す歌は、『沙石集』と『金撰集』にある注〔例文9後半〕がついている話と比べますと、より具体的な、より直接的な理解と適用を導く様に思えます。

前と同じく説話は、神明の本意を中心に、和歌のメッセージは、修行者に向けられていて、話の究極性つまり「財を捨てよ」をずばりと示しています。

〔10〕上総国、高滝ト云所ノ地頭、熊野詣<sup>〔マウデ〕</sup>シケリ。只一人有ケル娘ヲイツキカシツキテ、且ハ彼レカ<sup>タメ</sup>為トモ思ケレハ、相具シテソ詣テケル。此娘メ、

貞メ形チ宜<sup>ヨロシ</sup>カリケルヲ、熊野ノ師ノ坊ニ、ナニカシノ阿闍梨トカヤ云フ、  
若キ僧有ケリ。京ノ者也ケリ。此娘ヲ見テ心ニカケテ何ニモ忍カタク覺ヘ  
ケルマヽニ、我レ浄行ノ志有テ、靈社ニテ仏法ヲ行セント思ヲ企テ、<sup>カカル</sup>斯惡  
縁ニ相テ妄念押ヘカタキ事、口惜ト思テ、本尊権現ニモ、「此ノ心止メ給  
ヘ」ト祈誓シケレトモ、日ニ随テ彼ノ面影立副テ忘レス。何事モ覺ヘサリ  
ケレハ、心ノヤル方ト、ライ打チカケテアケレ出テ上総國ヘソ下リケル。  
サテ鎌倉ヲ過キテ、ムツラト云所ニテ使船ヲ待テ上総ヘ越トテ、浜ヨリ伏  
シテ歩ミケル程ニ、歩ミ疲レ打マド〔ロ〕ミタル夢ニ見ケルハ、便船ヲ得テ  
上総ノ地ヘ渡、<sup>タカクキ</sup>高滝ニ尋行ス。主シ出テ合ヒ、「何シテ下給ヘル」ト云フ。  
「鎌倉ノ方、床敷テ、修行ニマカリ出テ待つルカ、近キ程ト承テ、御スマ  
ヒ〔ワ〕モ見奉ラントテ參シテ侍」ト云フ。去テ様々ニ持テ成シケリ。臆テ  
上ルヘキ体ニ申ケレハ、「シハラク田舎ノ様モ見給ヘカシ」トテ留<sup>ト</sup>メケリ。  
自<sup>(ママ)</sup>本、其ノ志ナレハ留、トカク伺依テ忍々ニ通ケリ。互ノ志シ浅カラス。  
去程ニ男子一人出キヌ。父母此レヲ聞テ大ニ瞋リ、臆テ不孝シタリケレハ、  
忍テニカリ有ケル人ノ許ニ隠レ居テ、年月ヲ送ル程ニ、只一人娘メナレハ  
不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>カシテ赦シ、此ノ僧モ若キ者ノ貞メ形チ尋常ナル者也ケル上、サカ  
ヘシク手跡ナントモ子細ナカリケレハ、「今ハ子ニコソシ奉ラメ」トテ、  
鎌倉ヘモ代官ニ上セ、物ノ沙汰ナントモ賢クシケリ。孫モ、又、形チ実ニ  
人々シク見ケレハ、カシツキモテナシケリ。子共兩三人出キヌ。此ノ子十  
三ト云ケル年、元服ノ為ニ鎌倉ヘ上ル。<sup>〔ス〕</sup>サマヘノ具足共モ用意シテ、船  
アマタシ立<sup>クチ</sup>テ海ヲ渡ル程ニ、風ハゲシク波高キニ、此ノ子船ハタニ望ミテ、  
錯テ海ヘ落入ヌ。「アレヘ」ト云ヘトモ沈テ見ヘス。胸ヒシゲテ、アワ  
テサワクト思テ夢メ醒メヌ。十三年カ間ノ事ヲ倩ラ思ツヽクルニ、只片時  
ノ眠ノ間也。設ヒ本意ヲトケテ樂榮有トモ、只、暫クノ夢ナルヘシ。悦ヒ  
有リトモ、又、悲有ルヘシ。由ナシト思テ、臆テ其レヨリ帰テ上リ、熊野  
ニテ行ケリ。和光ノ御方便ニテコソ有〔リ〕ケメ。

墓無シヤ浮世ニテコソ厭ヒシニ何<sup>イカニ</sup>心ノ猶<sup>ナツ</sup>殘ルラン

浮ムヘキ御法リノ舟ニ乗りナカラ心ト沈ム人ソハカナキ<sup>②</sup>

現世への執着を否定する点で、この歌は説話の教訓性と一致し、又誰にでもあてはめられるし、僧侶への批判も多少なりと含まれている様に見えます。この事は2番目の和歌によって、もっとはっきりしてきます。

〔11〕日吉ノ大 後、「山法師多ク天狗ト成テ和光ノ方便ニ依テ出離ス」トコ  
〔宮ノ〕脱カ  
ソ申伝タレ。其レモ諸社ノ中ニ十禅師靈驗<sup>ケン</sup>新タニマシマス。此レハ本地地  
蔵薩埵也。トテモカクテモ人身受ケタル思イ出、仏法ニ遇<sup>アエ</sup>ル<sup>シルシ</sup>記ニハ、一門  
ノ方便ニ取付<sup>トリ</sup>テ出離ヲ心指<sup>サ</sup>スヘシ。心地観經ニハ、「一仏二菩薩ヲ憑<sup>タノ</sup>ムヲ  
要法トス」ト説ケリ。去レハ内ニハ仏性常住ノ理ヲ具セル事ヲ信シ、外ニ  
ハ本地垂跡<sup>スイ</sup>ノ慈悲方便ヲ仰テ、出離生死ノ道ヲ心中ニ深ク思染ムヘキヲヤ。  
三悪ノ火坑足ノ下ニアリ。六道長夜ノ夢未醒、瓜ノ上ノ人身ヲ受ケ、優曇  
花ノ法ニ遇<sup>〔遇〕カ</sup>ナカラ、成ス事ナク勤ムル事ナクシテ、三途ノ古<sup>〔ツ〕</sup>里トニ帰リ  
ナハ、千度<sup>チ</sup>ヒ悔<sup>ク</sup>キ、百度<sup>モモクヒ</sup>悲ムトモ、何ノ益カ有ルヘキ。多生ニ希ニ浮出テ、  
億劫ニ一度ヒ遇<sup>〔ママ〕</sup>。心ヲユルクシテ空ク光隱ヲ送ル事ナカレ。時人ヲ不待。  
死ヲ兼テ不<sup>ハ</sup>弁。努々勤メ行ヘシ。

曾我ノ十郎、五郎敵打時、空ニ有声云、

マタシキニ色ツク山ノ夕時雨コノ夕暮ヲ待テ見ヨカシ<sup>③</sup>

まず本文に続く『金撰集』の歌を検討してみます。一見したところでは、曾我兄弟と天狗となった比叡山の山法師との間に、どんな関係があるのか明らかではありません。この和歌を解する鍵ともなるはずの、そのところをさぐる為には、『金撰集』が二つに分けた、元の『沙石集』では一つであった説話の前半を参照する必要があります。

〔12〕南都小輔僧都璋円トテ、解脱上人ノ弟子トテ、碩学ノ聞ヘ有リシガ、魔<sup>〔ニテ〕</sup>

道ニ落ち、或ル女人ニ付テ種々ノ事申ケル中ニ、「我カ大明神ノ御方便イ  
ミシキ事ハ、聊モ<sup>(子)</sup>値遇シ奉ル人ヲ、何ナル罪人ナレトモ、他方ノ地獄ヘハ  
<sup>ツカ</sup>使ハサスシテ、春日野ノ下ニ地獄ヲ構テ取入ツ、毎日晨朝ノ第三ノ御  
<sup>(以下三八字上欄に記ス)</sup>殿ヨリ地蔵菩薩灑水器ニ水ヲ入、<sup>(ママ)</sup>錫杖ヲ副ヘテ水ヲ灑給ヘハ、一滴水罪人  
口入テ苦患暫ク助リ、少正念ニ住スル時、大乘經<sup>要</sup>悪文・陀羅尼ナムト唱テ  
聞セ給事日々怠無シ。此ノ方便ニ依テ漸々ニ浮ヒ出テ侍ル也。<sup>②</sup>

では、この瑋円——魔道に落ち、和光の方便として構えられた特別な地獄で地蔵菩薩によって徐々に浮び出る——と山法師——天狗となりて和光の方便に依って出離する——と和歌との関わりは何でしょうか。

件の和歌は、言うまでもなく、『曾我物語』に典拠を見る和歌と殆んど同一です。<sup>②</sup>『曾我物語』第8巻、頼朝の「富士野の狩」に出て来る歌です。曾我五郎と十郎の二人は、富士野の狩での混雑の折を利用して、父祐泰の仇討ちを遂げる為に祐経を殺害しようとします。しかし、なかなかその好機はなく、時が過ぎて行きます。翌日頼朝「鎌倉に入らせたまふべきなれば」狩りは終ってしまいます。そこで畠山重忠「今宵うたではかなふまじ」との思いで今宵が最後のチャンスだという事を曾我兄弟に知らせたかった訳です。只「人々あまた有ければ」歌の形を取ってその意志を伝えたのです。ですから、歌は暗号化されたメッセージであって、仇討の実行はタベ迄待った方が良いとの旨です。兄弟のひとりは、「思ふ事あらば今宵かぎり」とその歌の心を正しく読み取ります。

では、どうして『金撰集』の件の説話に「マタシキニ色ツク……」の和歌が当てはめられたのか？ その答えは、引用文〔11〕の説話にあるようです。

先ず、次の大事な三点が取り上げられます。

①和光、神明の方便

②人身を受け、又仏法に会える事の稀れである事、つまりユニークなチャンス<sup>要</sup>を力説する。



③「瓜ノ上ノ人身ヲ受ケ……」の中「成ス事ナク勤ムル事ナクシテ三途ノ古  
ル里トニ帰りナハ」

とある文句には、曾我兄弟の仇討に際して、時を無駄にせずに遅過ぎない内に  
実行する様にと誘いが読み取れるのではないのでしょうか。

又これだけではなく、別の関連付けも考えられます。説話は神明の衆生を助  
ける為の方便や地藏菩薩の靈験が記されています。一方和歌の出典である『曾  
我物語』の場面を考えると、「マタシキニ……」という歌は、地獄中の地藏  
に当てはまる畠山重忠の一種の方便とみなすことが出来ます。又地獄は、曾我  
兄弟にとっての狩場に当てはまる等の、構造上、比較出来る要素がいろいろと  
見つかります。勿論、説話は仇討ち話ではなく、光陰を無駄にせずに仏法の修  
行に勤める事によって出離生死の道に入るという事を強調しています。

こう考えてきますと、歴史的に『金撰集』編さん推定時期と『曾我物語』は、  
何世紀も離れていないのですし、しかも曾我兄弟の物語は大変広く知れ渡って  
いて、人気を集めたようですから、その中の和歌を付記する事によって、説話  
のイメージをより明確に伝えられるとの意図があった様に思えて来ます。

## 結 び

これ迄取り上げてきた和歌は『金撰集』の和歌全体のほんの一部分でしかあ  
りませんから、これと言った断定的結論は導かれませんが、それでも今のとこ  
ろで言えることは、

- ①『金撰集』の和歌は、説話の内容を概括するというより、多少のニュア  
スを与えながら、その究極性をより明確にし、禅の精神を基に、強調して  
います。
- ②これまで見て来た説話は、神明の靈徳や方便を中心に置くが、和歌は、  
度々その角度を替えたりして、人と人のあるべきようを中心にその信心の  
内面化を先に置く様に見えてきます。その表現法は、説話の教訓性を取り  
上げ、人中心の具体例に絞っていると思われれます。

## 注

- ①詳しくは「金撰集」（古典文庫）解題を参照。
- ②「金撰集」巻1の11、14、15、25、27、31、36、51、巻2の1、4、10、12、15、35、37、巻4の41等々参照。
- ③「日本古典文学大系」による。
- ④巻1の5、巻2の6参照。
- ⑤巻5末1、巻5末8参照。
- ⑥巻5本12参照。
- ⑦巻5本9、10参照。
- ⑧巻5本11、巻5末8、9、10、11。
- ⑨巻1の7、巻3の8等参照。
- ⑩「金撰集」解題参照。
- ⑪「金撰集」巻1の5。
- ⑫「日本古典文学大系」巻1の4。
- ⑬「金撰集」巻1の8、「沙石集」巻1の4参照。
- ⑭「金撰集」巻1の9、「沙石集」巻1の4。（\*「沙石集」ではここは「下<sup>オロシ</sup>参ラセテ」と読むのと違って、「金撰集」では「恐レマイラセテ」と読む事には何か意味があるのでしょうか？ それともただの誤字か？）
- ⑮「金撰集」巻1の12。
- ⑯「金撰集」巻1の15、「沙石集」巻1の10。
- ⑰「沙石集」はここでは、やや違う文がある。「是ハ聖教ヲモ学シ、先達ニモ返ヅキタル人ノ中ニハ、希也」
- ⑱「金撰集」にはないが、「沙石集」上には次の文がある。「念仏門ノミナラズ、天台・真言・禅門ナドニモ、辺国ノ末流ニハ多ク邪見ノ義門侍ルニヤ」
- ⑲「金撰集」巻1の16、「沙石集」巻1の10。
- ⑳「金撰集」巻1の18、「沙石集」巻1の7。
- ㉑「金撰集」巻1の20、「沙石集」巻1の7。
- ㉒「金撰集」巻1の23、「沙石集」巻1の9。
- ㉓「金撰集」巻1の7、「沙石集」巻1の6。
- ㉔「金撰集」巻1の6、「沙石集」巻1の6。
- ㉕まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮をまちて見よかし。（『曾我物語』第8巻、「日本古典文学大系」）。